

千空研究

第5号

ならば天間のみよ子欲し

千空さんの句には、民謡の歌詞を詠みこんだものがある。いわゆる本歌取りであろう。色紙の句は、南部民謡の「みよ子節」から。「親父もらてけだ 嫁ほしくない ならば天間のみよ子欲し」と盆踊りで歌われた。

みよ子は天間林村（現七戸町）

で明治24年に生まれた実在の人物。陸軍軍馬補充部七戸派出に農婦として勤めた。明るく気立てがよく愛嬌があったので、村の若者たちのあこがれの的だったという。

津軽民謡の句もある。

身にしむや米ならばよき

十三の砂

（人日）

つがる野の米ならばよき

深雪かな（五所川原俳句会）

本歌はご存じ「十三の砂山」。

「十三の砂山米ならよかるナ

西の弁財衆にただ積ましょ」砂

だけでなく雪にも連想が広がる。

本歌取りは句がふくらむが、知

らない人にはそっぽ向かれる。

みよ子は南部では有名だが津軽

で知る人は少ない。

千空さんにとって愛着のあっ

た一句。

画は櫻庭利弘さん。



野も山も青し天間のみよ子欲し

（天門）

目次

ならば天間のみよ子欲し

〈回想の成田千空〉

私の愛誦句

千空さんと川柳

千空、高橋竹山を詠む

〈作品鑑賞を読む〉④

酷寒の迅脚の牛怖しや

父・米田一穂と千空

青森萬緑会通信句会誌『未来』を中心として④

千空俳句の礎③

〈千空点描〉じゃわめぐ

永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々④

青森県文芸協会と成田千空

歳時記に採られた千空句④

『萬緑季寄せ』

〈成田千空資料再録〉⑤

会員名簿・北極星

千空研究会の事業

① 詳細な年譜の作成

② 千空俳句データベースの作成

③ 関係資料の収集

④ 関係者からの聞き取り

⑤ 会報『千空研究』の発行

⑥ 評伝 成田千空』の刊行

1

中村 雅之

野沢 省悟

佐藤 陽子

小川 国夫

米田 省三

西谷ともえ

齋藤 美穂

13

14

16

回想の成田千空

私の愛誦句

中村雅之

私の寢室の床の間に、千空さんの色紙がかかげられている。ベッドに寝ればまっ正面に見えるように。

色紙は額入りで、句は、

海鼠あり津軽の辛き地酒あり

である。

夜ベッドに就寝のたび、夜半に目ざめるたび、朝起きるたびにこの句を見、千空さんを思い出す。といっても、私と千空さんとの会いはその割に多くなく、せいぜい五、六回もあるだろうか。対談が二回ほど、あとは文芸協会の会議や集いで、会いで、プライベートな会いは一度もなかった気がする。

それでいて、親近感がふかく強いのは、あの人なつっこい独特の風貌と、ソフトなささやかけるような会話……。そして俳句界の巨人でありながら決してえらぶらない人間性のせいであろうか。「海鼠あり」の句がどれほどの句か私にはわからないが、ただ私はこの句がとても好きである。

理由は、津軽の風土と千空さんの温かい人間性の感じられる親しみぶかい句であるからであるが、

そのほかに、私の好物の「海鼠」と「地酒」がよまれているからでもある。

この句をよみ、千空さんも「海鼠」と「地酒」が好きだったのかと思うといっそう親近感が湧く。「海鼠」には「地酒」がよく合う。そしてその「海鼠」はなんといっても「横浜海鼠」が最高であろう。爽やかな磯の香りと適度の肉のやわらかさがあって申し分ない。がただ値段の高いのが玉にキズで、買うのをためらうことがある。

それに比べると西浜の「海鼠」はぐっと安く値段は手ごろだが、こちらはまた肉質が固いのがキズである。品種が異なるのか、荒海の環境のせいなのか「横浜海鼠」のようなソフトなやわらかさがない。

若くて歯の丈夫なときはあまり気にならなかったが、年老いて歯の弱ったいまでは難儀である。買ってすぐ食わずに、三、四日置いてやわらかくなるのを待って食べたりにしている。

「海鼠」にはビールや洋酒は不可でやはり日本酒、それも地酒が最適であろう。中央の銘柄酒は味、品質ともに平均化されて個性に乏しく、その点地酒はそれぞれの持ち味があつたのしい。

「地酒」でもっともよいのは「にぎり酒」である。澄明な清酒は上品だが都会人的でつめたい。「にぎり酒」は素朴で田舎者風で温かみがあり、その舌触りには人情と郷愁がこもっている。

「海鼠あり」の句から「海鼠」と「地酒」の話にすっかり脱線してしまつたが、千空さんの句については、俳句の知識のない私には何も言えないが、好きな句はいっぱいあり、その好きな句の中で、私をもっとも愛誦しているのが次の三句である。

一句目はすでにのべた、

海鼠あり津軽の辛き地酒あり

で、次は敗戦時の句、

敗けたりと思ふや代田泥深く

そして三句目は、ミサイル闘争のころの句、

柞原来て荒海や真つ向うに

である。

敗戦の句は、敗戦時の敗北感、虚脱感、疲労感を見事に表現した句で、この句をよむと敗戦時の足にまつわりついた田の泥の重さがいまも蘇ってくる。

敗戦をうたった歌に、

沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ
一本の蠟燃しつつ妻も吾も暗き泉を聴くごとく
齋藤茂吉

るる
宮 柊二

など著名な歌があるが、小作農民だった私の思いにはいずれも遠く、その点千空さんの句はもっとも身近な実感として心揺るのである。三句目の、柞原来て荒海や真つ向うに

の句は、句集『人日』の「七里長浜 十三句」の中の一旬で、七里長浜沿いの柞原と荒海の日本海をとらえ、それにおのれの姿勢を写象した句である。

この句は直接に「ミサイル闘争」をよんだ句ではないようだが、しかし私には反権闘争の句として心にのこる。

「柞原」はすなわち「ふるさと」の代名詞であり、「荒海」は巨大な国家権力、そして「真つ向うに」

は、それに立ち向かう人々（千空さんも含めて）の姿として心にひびくのである。

この三句は私の終生の愛誦句として忘れることはない。

さて、この稿を書いていたら、急に雷が鳴り霰がふり庭が白くなった。予報では、このあとも大荒れになり吹雪くだらうとのこと、そう言えば、千空さんの亡くなった日の前後もずいぶん天気が荒れて、まだ十一月というのに寒くふぶいた記憶がある。それを思い出しながら、今夜は久しぶりに海鼠と地酒での独り酒にしようと思う。

（歌人／つがる市）

千空さんと川柳

野沢省悟

僕が青森県文芸協会に入会したきっかけは、一九八四（昭五九）年、当会の文芸新人賞を受賞したことである。その二年後八六（昭六一）年、千空さんは当会理事長に就任した。その後おそらく幾度かお会いしていると思うが、記憶が定かでない。当時若かった僕にとって理事長就任の翌年、俳人協会賞を受賞し俳誌「萬緑」選者になった千空さんを、仰ぎ見ていたという状態であったと思う。

九一（平三）年秋、僕ははじめて千空さんの店を訪れた。千空さんは70歳。僕は38歳、親子ほどの年齢の差であった。その時はご夫婦で僕を一時間以上も相手をしてくれた。その時の千空さんの印象を「共済文芸」に次のように書いている。

体も貌も大きい。手も大きい。白髪を短く刈り、やや鍵鼻に眼鏡をのせ、喋ると早口である。声は大きくない。眼鏡の奥の眼は、僕と話していても現実の世界を見ていない様だった。ともかく忙しいという。萬緑の選だけでも一か月に千人以上の句を見ているという。「健康法がひとつある。夜ひと仕事終わってもすぐには眠らずお茶を一杯のんで静かに座る。何も考えないで座る。そうするとたいへん快い。それを毎晩つづけている」と話すと、すかさず奥さんが「それも最近はじめたばかりでしょ」と茶々を入れた。散歩をするときすぐ俳句の材料が目に入って来て、気が休まらな

いと言う。

この後、幾度も店へおじゃまするようになるのだが忙しい合間、筆を止めて必ず応対し、僕にきちんと向き合ってくれた。

川柳にも関心があるらしく、僕がある時、柳人の時実新子を話題にすると、ふいと立ち上がりすぐに一冊の古い「俳句研究」誌を出して来た。そしてページを開き、ここに載っていると、若い時の新子の作品を僕に教えてくれた。

また、ある時店の本を眺めていて、金子兜太著「愛句百句」（講談社・昭五三年刊）を見つけて、これを売ってほしいと話すと「それは売らない」と言う。この本には千空さんの句、

葦折れず氷面解けがたし父祖の野は

が載っており、見開き二頁で千空さんが紹介されていた。ところが、少しすると「まあ、いいか」と言って、本についてある定価で譲ってくれた。

加えて奥さんが、「何か一句書いてあげたら」と話し、僕の好きな、

滾々と雪ふる夜空紅きざす

を筆で書いてハンコまで押してくれた。これは今でも僕の宝物である。

千空さんが川柳に深い関心と愛情を持っていることを知ったのは、九四（平六）年十一月三日、僕の企画した「俳句・川柳合同研究句会」に参加、お願いした講演を聴いたときであった。当時、俳句と川柳の接近が話題となった頃で、互いのジャンルを確認しようとの目的で会を開いた。そこで千空さんに講演と選者をお願いしたのである。出席者は、俳人9人、詩人1人、柳人22人であった。講演の内容はすばらしく、千空さんは俳句と川柳を全く同等に考えていた。例えば、

私は思うんですけど、民衆文芸がどうして起こったかというと、二つの民衆文芸の形が考えられます。やはり当時の俳諧で言えば京都の文化ですね。京都の文化に対する民衆の反発があったはずなんです。ですから俳諧というのは芭蕉が言うように俗語です。和歌の伝統につながる連歌の伝統の雅語にたいして俗語を使うということです。俗語文芸として作ったものが俳諧として出発したのです。

川柳は俗語を更に俗に徹した言葉です。それで作者が非常に多かったということです。ですからそのエネルギーのなかには柄井川柳も名代ではありますけれど、階級としては一般の侍でもない一般の庶民の待遇ですね。庶民の待遇であって教養があっても当時の

京都の文化に対する反発があったと思うんです。もうひとつ自由な発想でやろうという形。俳句も川柳もそういう面では似たところがあるんです。民衆詩です。短詩形だということです。

と述べ、さらに次のように言う。

川柳は逆に季節感はさして関係なく、人生とか世相とか時代のそういうものに対する関心に移って行く訳です。そういうことになりますから自ずから自由な発想でしかも季節とか切れ字とかに束縛されない訳ですから、素材に対しても世界が大変広いんですね。俳句の何倍も広い、そういうことも一つの形式から生まれてくるということもありますので、川柳の方がずっと自由な発想でいい作品が残ってしかるべきだと思います。(略)

しかしながらなぜ文芸として認められないのかというと、卑俗の方向に落としてしまうからなんです。多分僕の独断と偏見になりますが、自由さというものが卑俗の方へ、おかしみの世界へうがったり、もじる、落としてくるそういうふうになってしまふんだと思います。

そして中村草田男の川柳観も紹介した。

中村草田男がこう言っています。「現代俳句は現代川柳と接するのはやむを得ない」と。川柳というものを作っていると俳句のようになるのだ。俳句を作っていて川柳になるようなこともあるかもしれない。そういうことを言っていましたね。つまり川柳のもっている自

由な発想、現代俳句のもっている近代化の要素、そういったものがないがしろにできるものではない、と注目していました。

この後、明治以降の川柳の流れに触れつつ、

「俳人が俳句を作っているつもりなのに実は川柳になっている場合、川柳の人が川柳のつもりで実は俳句になっている場合、両方の接点の中に居る。(略)だから自分たちはいい川柳を作る、いい俳句を作る。(略)それに専念する以外にない」と述べ、最後に「また新しい『俳詩』といったジャンルが出て来るかも知れない」と講演を結んだ。

俳壇の一流誌の選者であり後に蛇笏賞まで受賞する全国的俳人が、これほどまで川柳について語ったことを僕は他に知らない。個人的なことを言えば、九六(平8)年、僕の刊行した「現代川柳評論集・極北の天」の書評(東奥日報二月二七日掲載)を書いていただいたことも望外の幸せであった。

千空さんの川柳との関りはこれだけではなかった。九八(平10)年、蛇笏賞を受賞した年の二月二一日第五回「たんしの会」(俳句・川柳合同研究句会を発展させた会)に参加、選者をしている。出席者は俳人8人、川柳人18人、歌人4人であった。その翌年九九(平11)年六月六日、青森市で行った川柳大会「現代川柳・北の広場」にも参加、講演と選者をしている。出席者は全国から集い、俳人4人、川柳人60人であった。

このように千空さんは、川柳に理解があったというだけではなく、直接川柳人と接した。僕は思ふのだが、他ジャンルの人間と接することによって自身の俳句への刺激を得ようとしていたのではないだろうか。全国俳人の頂点在って尚、この

ような意志を持っていることに対して尊敬と同時に、その進むべき道への姿に畏怖すら感じる。その姿の一端を見せたのは、次のエピソードであると思う。

ある時、千空さんと雑談していたら、千空さんから突然、「川柳作家で目指す作家は誰か」と問われた。少し考えあぐねて、「誰も居ません」と答えてしまった。すると千空さんは「それならば芭蕉を目指せばいい」と僕の目を深く見つめて話した。この言葉を言われた時の千空さんのやわらかな頬の線が今もあざやかである。

このことが、いつであったか定かではない。ただこの文章が二〇〇二(平14)年「文芸おもしろ」一四九号に載っているため、それ以前であることは間違いない。「芭蕉を目指せ」という千空さんの言葉は、今から思うのだが、僕に言ったというよりも、千空さん自身が常に思っていることをつい口に出してしまったような気がする、この文章の末尾に僕は次のようなことも書いている。

いつのことだったか、千空さんに俳句をすめられた。僕の心は大きく揺れて傾いた。しかし踏んばった。千空さんという巨きくあたたかな存在のほとりでは俳句を行うことが、僕にとってあまりにも豊かな世界になりそうな気がした。と同時に、川柳というある意味での原野、荒地が僕には強い魅力であった。僕は千空さんにことわっていた。

それにしても「芭蕉を目指せばいい」とい

言葉は、僕の考えの埒外にあって僕を離さない。ともかく芭蕉の言葉であるという「俳諧は一生の草の道」にかなわぬまでも、とぼとぼと草の道へと通ずる道をさがしてゆきた

い。

おそらく「芭蕉を指せ」と言われてからほどなく僕は俳句をすすめられたと思う。たいへん迷ったしまいたいへん光栄なこととも思った。しかしこの時俳句に転じて僕は千空さんの期待に応えることはできなかったと思う。

そんな千空さんに僕は、かなり不遜なことを言っている。今から思うと汗顔の至りである。○五（平17）年、僕は当時川柳誌「双眸」で、千空さんにインタビューしている。その時の一コマである。

文芸あおもり（二〇〇四年七月）に載った私の入退院前後の俳句。一五四句ありますが、あれを読んだ野沢さんが「あれは川柳ですな」って、そんなふうに言われるとショックなんだけど、そう言われればそうかな、と。と言うのは俳句の場合は自然を見るでしょう。それがないもんですから、湧いてくるものを俳句にする。そこが川柳作家からみれば川柳に見えるのでしょうか、たぶん。

この千空さんの謙虚さには一人間として深く感銘した。千空俳句の根本のひとつには常に持っていた、万物に対する謙虚さがあるのではないか、と僕は思う。

最後に、僕が今でも勇気づけられている、千空さんの言葉がこの対談の次の言葉である。

俳句も和歌という雅の世界の中から出てきた文芸を、完全に俗語の併用に持ってきた。俗語を生かして来た。俗語というのは庶民の世界です。革命したんですよ、短歌から俳句に、俳句をさらに川柳は革命したんです。ですから川柳は革命の流れの中にある。川柳というのは庶民にだんだん降りて来る。だから誰にでも出来る文芸になって来た。誰にでも楽しめる文芸、全体の質のトータルから見るとレベルが低い。だからこそ新しく川柳をやっている人を私は尊敬しますね。

「俳句をさらに川柳は革命した」。川柳に対する千空さんのこの言葉は、僕自身にとってもそうだが、多くの川柳人にとっても大きな力となる一言であろう。

（柳人／柳誌「触光」主宰／青森市）

千空、高橋竹山を詠む

佐藤陽子

第4号の冒頭に、千空さんが筆をとっておられる写真がかかげられている。「写真は平成12年8月30日、高橋竹山の三味線を世に広めた青森芸術鑑賞協会事務局長だった佐藤貞樹さんに招かれたとき、（略）」

火も水も湯も澄む君が山の家 千空

この句は未発表で、佐藤家だけに残されている」。

解説の文はこう結ばれていた。しかし実は、千空さんが筆をとられた未発表の句は、佐藤家にもう一句残されている。

竹山の立命の貌まるめろに 千空（色紙）

が、それだ。亡き佐藤貞樹は、竹山のために自宅の一部を「高橋竹山記念資料室」としていた。その記念室へと千空さんが下さったのがこの句。

先ごろ研究会の佐々木さんから、千空さんと故貞樹との交流の回想をと乞われ、書くついでに我が家にある記念室の千空さんの色紙句に触れて、「千空が竹山を詠んだものはこの句ぐらいでしうか」として送ったところ、間もなしに佐々木さんから「千空が竹山を詠んだ句を、七句見つけました」とのお手紙を頂いた。その七句に出典・季語等の資料がそえられて、驚喜し拝読・再々々読。自家句一句なりし世界がにわかにはひらけた。まずご調査の労へ大きに感謝申し上げながら、見つけて下さった句の紹介を。次いで佐藤家色紙一句を加えた八句全体を見ての貧しい感想でもって改稿の責を果たすしたい。

(1) 七句紹介

*（発表の便宜上、本稿のみの作品番号を付す。順序は発表年次にしたがう）

- ① まるめろのごと竹山の冬の貌
- ② 竹山が余命の韻き冬の三味
- ③ 裏山の眠りは深し竹山も
- ④ 目つぶしの雪ふりしきる津軽三味
- ⑤ 大いなる竹山の顔山眠る
- ⑥ 雪となる三味極道の弾き語り

⑦ まるめろの拳あまたや山の家

注 ⑤⑥⑦には「記念の家にて 三句」の詞書がある。記念の家は佐藤宅の「高橋竹山記念資料室」をいう。

(2) 佐藤家色紙（記念室蔵）

⑧ 竹山の立命の貌まるめろに

出典は③以外は『萬緑』に。七句の発表年は、一九九八（平成10）年と一九九九年の二年。実詠年を考慮せず発行年に限れば佐藤家色紙（⑧二〇〇〇年）を加えても三ヶ年。この前にも後にも千空の竹山を詠む句は皆無だということ。私はこの三年に意味があるかを考えた。

貞樹にとってのこの三年は、一九九八年に竹山が死去してから自らが他界するまでの三年であった。この間貞樹は後世への遺書というべき『高橋竹山に聴く―津軽から世界へ』（集英社新書 二〇〇〇年）を執筆出版している。一方貞樹はこの執筆の身を削る苦斗の中で俳人成田千空と出会う。特別なこの月日のなかに結ばれた千空・貞樹。この二人の、短くあったが厚く濃い交流の時間、これが「千空竹山を詠む句」が生まれた三年なのである。句を見ていく前に。この三年に千空・貞樹にあった主なできごとのおさらいを。

成田千空は一九九八年、俳句界での特別な賞である蛇笏賞を受賞。その同じ年貞樹は第19回青森県文芸協会賞を、芸術鑑賞運動への功などを評価されて受賞。これには当時同協合理事長だった成田千空がつよく推したのが大きかったと伝わる。

これらのことはまた交流三年の華というべき「千空対談―高橋竹山を語る―佐藤貞樹」（第10回・『文芸あおもり』第147号 二〇〇〇年七月）につながる。

千空、竹山を詠む句の鑑賞

ぶらり散歩と、全句眺めたいところだが、見るのも話すのもほんのわずかなるのをお許しねがって、テーマを二つに。「かお」と「まるめろ」。まず「かお」では千空はかおを「貌」「顔」と詠みわけたが触れているゆとりがない。それより話しておかねばということがある。それは千空の



ブロンズ像
「津軽のうた 高橋竹山」
村田勝四郎 制作

詠むかおだ。千空は生身の竹山のかおを見て詠んだのではない。実は竹山をモデルに制作されたブロンズの竹山像を見て詠んだ。勿論千空はそれを知っていたし、ブロンズであろうとなかろうと竹山は竹山なのだ。⑧で言えば、千空は像と魂のやりとりをするぐらい真剣に対面して、竹山の人生と芸術の到達域を「立命の貌」ひとことで喝破した句を作った。像という、モノのカタチを通して魂に迫った名句と思う。でも相手のカタチに魂が入っていなかったらこの名句は生まれなかったと思わないか。

では。「相手のカタチ」、ブロンズ竹山像の履歴をチャリと見るとしよう。

像の作者、名は村田勝四郎、一九〇一年大阪生まれ。東京の美術学校卒業。あ、彫刻科塑造部です。生涯塑造ひとすじを貫きます。

勝四郎は晩年、塑造人生の最後何としても高橋竹山を造りたいと思う。病気の老体を何度もジアン・ジアンに運び演奏中の竹山をスケッチ。その後転んで骨折しても執念でつくり続けて完成、渋谷の松濤美術館に出品。それが「津軽のうた 高橋竹山」。この作品、このカタチには、勝四郎の魂がこめられている。松濤美術館との同体の一体が現在佐藤宅記念室に安置されているブロンズ竹山像。納入した五年後の一九八九年、八十八歳で亡くなった。

千空と勝四郎の縁は意外にも俳句にもあった。兄の影響で早くに作句を始め山口誓子に学び上京後は水原秋桜子の知遇を得、『馬酔木』に投句。なかなかの句歴で、千空に会えていたら話がはずんだかも。だから竹山ブロンズ像と千空俳句とは、えもいわれぬ俳味で結び合わされているような……。そんなカマリがしてはこないだろうか。

テーマ2は「まるめろ」

① まるめろのごと竹山の冬の貌

七句の最初でいきなりまるめろの香（カマリ）立つ竹山。竹山の印象を「まるめろのごと」ひとことと決めてしまったこの曲者のワザ、お見事。竹山はまるめろ、まるめろは竹山。

⑦ まるめろの拳あまたや山の家

「記念の家 三句」の結句、挨拶の句。挨拶なのでまるめろをほめ、木と、木のある。貞樹をほめる。「拳」のゴツゴツしたイメージで果実の質感を「あまたや」で量感を、すんなり表出。挨拶も含めて何でもない詠みようでいてなかなかのもの。

「まるめろ」をひとまずおいて、三味線。なんと千空は「小さいときからずっと唄・三味線に関心があったんです」「私の中に風土性に内在するもののおいがしみこんでいるのではないか」。

〔千空対談〕千空がこのような人なので、三味線の句をとりあげないというのはいそうなご無礼

【作品鑑賞を読む】④

酷寒の迅脚の牛怖しや

旧制中学のころ、私は四きばかりの道のりを自転車ですべていた。(略)

ある朝、私が駆け足の女学生たちのわきを自転車で通りすぎようとしていると、向こうから牛が走ってきた。黒牛だった。何か興奮することがあって、飼い主から手綱を引きちぎり、鼻から白い息を吐きながら女学生の隊伍たいごへ突っこんできた。彼女たちが乱れて道をあけると、牛は駆け抜け、私の自転車に触わりそうになって、先へ走って行った。

私はこの出来事を、成田千空さんの次の句から思いだした。

酷寒の迅脚の牛怖しや

この句には、私の少年時代に通じる牧歌のおもむきがあると思ひ、なぜだろうか、と考えてみた。

だ。……だが深入りしそうだし、そうなれば紙面がパンクするだろうし。涙をのんで④一句に。

④ 目つぶしの雪降りしきる津軽三味

一九九八年五月萬緑会が夏泊で吟行会をした時佐藤宅に寄り記念室でCDで「岩木」を聴いて「あれを聞いて一句できました」〔千空対談〕がこの句。読みくれば声の底から門付けの竹山が現われ盲目の竹山が現われる。『萬緑』以外にも幾つかが採る。千空自身の好きな句ではなかったか。――他の三味線句、ご免下さい。

そして、それは「怖しや」という形容詞のせいだと思ひ当たった。あの時女学生たちも私も怖かった。当たり前なことだが、それが率直な日常的な気持ちの反応なのだ。

つまり成田さんは、怖いものを怖いといっているの、ここには、ある村に生活している素朴な人々がいるということになる。彼は村人になり代わって俳句を作っているかのようだ。(略)

革いろの日暮れ耕馬の島一つ

この句は生活のキツさを詠んでいながら、言葉はキツさすれすれのところで丸みを帯びている。そのことは同時に、労働とはこらえることだともいっているかのようでもある。特に「島」という墓の古語をもってきたところは、労働に労働を重ねてきた先祖たちへの想像がとどいている。

(作家／小川国夫)

しまいはまた「まるめろ」

「こぶしあまた」のまるめろに実がなくなつて久しい。毎年次はと待ったがとうとうあきらめた。数えれば戦後七〇年はとうに越している。百年老木、よくがんばった。でも、ああ。こぶしあまたのあの秋は、夢か。

千空はみのり豊かを感じさせるまるめろを好んで詠んだ。八句中三は少なくはないだろう。

まるめろの句を二句並べる。

① まるめろのごと竹山の……。か。お。

⑧ 竹山の立命のか。お。まるめろに

詠んだ時も所も違って、胸像を見て詠んだのだけが同じ。二句は、あまりにも相似形では、と思うが、この詠み方が千空俳句の本分なのだ。庭のまるめろの木は、わかったというように頭をゆすり、ひとり海風に吹かれていた。

そんな一日。調査研究員齋藤美穂さんの報告(今・4号)に出会う。驚ろきは、若き日の千空―成田ちから―が、方言詩人であったこと。おなじく木村助男。叔父の遺志を継ぎ活動する捷則さん。知るほどに感動深く、そしてうれしくなった。

ただ、この稿は「千空、高橋竹山を詠む」主題のもとに、から元気で歩いてみたものの、初めに意図した「鑑賞」も道半ば以下。天空の千空さんは「何をやらせても力不足なヤツ」と嗤うに決まっている。情けないやら恥かしいやら。しかたない、庭の枯木のまるめろにでも声掛け、願ってみようか。「枯木に花が咲くものなら力を下さい」と。それならいっそ、花咲かババア、灰をひと握り―、「カレキニハナヲ サカセマシヨウ!」

*『讀賣新聞』1977年2月21日付「暗い国」⑥「耕馬の島―平凡の中に非凡を見る」から。

(高橋竹山記念資料室／東津軽郡平内町)

父・米田一穂と千空

青森萬緑会通信句会誌

「未来」を中心として (4)

米田省三

一穂には夢があった。それは「萬緑」誌上において、少しでも多く草田男の選に入ることであった。「千空研究」二号でも述べたように、万年一句組でもいいから、萬緑で草田男の指導を受けたい、そういう気持ちで入会したのではあったが、人間欲が出るものである。

「未来」四二集（昭和三十四年四月五日発行）に、「横超さんの思い出」という文章を書いているが、その中で、「私が萬緑に入ってから成績は、二十九年十九句、三十年二十九句、三十一年三十七句、三十二年四十一句、三十三年六十一句である。」と記し、かつて、岐阜県の梅村登という開拓の先駆者を訪ねたとき、「一般人は財を銀行に貯蓄し、二宮尊徳は徳を天に貯蓄し人を導く。私は勤労を大地に貯蓄して収穫を得る」という話を聞き、それでは自分は「草田男先生の選句を貯蓄する」という思いに至ったという。そして、昭和三十四年の新年を迎えるに当たって、「今年こそは……」という思いを千空に伝えたら、千空は、書簡でもって、「初寝覚今年なさねばなす時なし」という草田男の句を引用して、「他人の句にひかれるな、自分をいとおしめ」と諭したという。これと同じようなことは、前年の青森県で行われた萬緑全国大会で、温川温泉に宿泊したときも

「お前の句はまだ人に左右されるところがある。萬緑には萬緑調があるが、その中であって早く自分の句を作れ」と言われたとのことである。この言葉は、ずしりと胸に応えたに違いない。

草田男に師事し、その選に入るのを目指すのは当然のことである。しかるに、選ばれることだけを念頭において、形だけを真似してはいないだろうか。これが草田男が目指している俳句だと勘違いしているところがないだろうか。本当に草田男に自分の作品を問うという姿勢のもと句作、投句しているのだろうか、等々様々な自問自答が続く。その結果得られた一つの解答が、シベリア抑留の際、同じく満州へ西本願寺派の布教僧として渡り、そのままシベリアに拉致された横超さんから教わった「計らいを捨てよ」という言葉であった。人に認められるような句を作ろうとか、萬緑誌上に何句掲載されるよう努力しようとか、そういう意識を捨てて、「句を作ろうとするからいけないのだ。自然に生まれて来るものでなければいけないのだ」（横超さんの思い出）という結論にたどり着く。

青森県近代文学館の検索装置に収められている一穂についての解説（蛭名晶子氏執筆）を読むと、「俳句への情熱は、草田男によって開花された。しかしいわゆる「萬緑調」（草田男主宰俳誌「萬緑」と言われるものでは無く、最も萬緑調では無いという評価さえある。」と指摘されているが、まさしく一穂が一穂として認められていく過程は、草田男という偉大なる指導者を一つのメルクマールとしながら、いわゆる萬緑調に泥むことなく、いかに自分らしい句を作っていったかという過程でもある。

それにしても草田男の目指す世界は、あまりにも深遠で哲学的、かつ革新的である。どこまで一穂が理解、咀嚼し、肉体化できたかは分からないが、先述の蛭名氏の解説文によれば、「草田男の教えを実体感として受け止めている」と記されている。

ところで、千空が自ら第一句集と称する『地霊』が、昭和五十一年に出された。全国的にも大きな反響を呼んだ句集で、個人的にも、千空の数ある句集の中でもっとも心ひかれる句集である。

この句集について、昭和五十二年「萬緑」二月号で、「成田千空句集『地霊』評」という特集を行っている。その中で、萬緑同人宮脇白夜は、「句集『地霊』ノオト」で、次のように評している。「その句業は、師草田男の作風を徒らに模倣し、それを程よく、ローカリティで味付けした——というような、いわゆるエピソードとしてのそれではない。（中略）師の足跡をもとめず、師のもとめたるところを求めて、今日まで孜孜として、句作一筋に努め、その結果「芸」と「文学」の混然一体となった、ユニークな詩的境地を開拓したのであった。」

これはまさに、千空が一穂に対して日頃アドバイスしていたことの自らの実践にほかならない。日本の伝統芸術は型を重んじ、師系を重んじる。しかしながら、一流の芸術家と言われる者は、重んじるだけではなく、そこから必ず一歩出ている。この一歩がいわゆるその人の独創性であり、個性となるのである。千空は、ある意味、生涯を通じて草田男と対決してきた俳人であった。そしてそこから千空という個性もまた、形成されてきたと言えるであろう。

（俳文学会会員／十和田市）

千空俳句の礎 (3)

西谷 ともえ

青森俳句会は昭和十五年三月に、当時あった多くの結社を一つにまとめた超結社の会として設立、五月には機関誌「海流」を創刊した。『俳句は遊びの文学』によると、「海流」は用紙不足のため、年二〜三回しか発行できなかったという。現在、青森県近代文学館蔵の昭和十五年五月刊行の創刊号と青森県立図書館所蔵の昭和十七年十一月刊行の第三号の二冊（いずれもコピー）しか確認できないため、いつ頃まで、どのくらいのペースで刊行されていたか明らかではないが、昭和十七年十一月で三号であるから、実際には年一冊くらいだったのではないかと想像出来る。福田空朗「暖鳥創刊の頃Ⅰ」（「暖鳥」第三四七号）等によると、青森空襲の頃には既に廃刊していたようである。

千空さんは昭和十八年、吹田孤蓬に誘われ、青森俳句会に参加する。松濤社から離れた昭和十七年頃以降、俳句以外にも小説や方言詩を書いていたことは以前述べた。再び俳句中心に活動するきっかけが青森俳句会入会で、千空さんの第二の俳句人生のスタートといってもよい。会誌は出せなかったが、句会は頻繁に行われたという。『俳句は遊びの文学』によると「めいめい勝手に句をつくり、句会で議論し」ていたが、「表現の自由を弁えていた俳句仲間」だったので「激論になっ

ても喧嘩」にはならず「楽しい雰囲気」だったという。千空さんの句が掲載された会誌は確認できないが、青森俳句会は昭和十九年に合同句集「海流」を刊行しており、一人見開き二ページに十句ずつ掲載されていることが確認できる。（青森県近代文学館・青森県立図書館等に所蔵あり）千空さんの句を引用する。（番号は引用者）

- ① 岩木嶺は巨きく手毬唄やさし
- ② 雪切りし街洞然と寝しづまり
- ③ 白鳥の啼かんとす頸ほそりけり
- ④ 鯁船入りつぐ海の盛りあがり
- ⑤ 家ぬちの柱が光り夏来る
- ⑥ 佞武多見る人の歩みにしたがへり
- ⑦ 晩涼の鶏の眼青き光あり
- ⑧ 頬かむり皆真白なる豊の秋
- ⑨ 颶風や街がつしりと組みあへる
- ⑩ 時雨寒菜の青々とゆであがり

①は『地霊』掲載の句で、千空さんの代表句の一つといえるが、『地霊』では「巨きく」が「大きく」と改められている。また、『俳句は遊びの文学』には合同句集「海流」掲載の句として①③に加え五句計七句挙げている。おそらく会誌「海流」掲載のものを合同句集のものと勘違いして掲載したのであろう。

- ⑪ 蒼々と夜の峰見ゆる魂まつり
- ⑫ 耕牛の底びかりして戻りくる
- ⑬ 燈を消せば燈の流れくる夜の秋
- ⑭ 家の奥さみしくなりし深雪かな
- ⑮ 土くれのおのづと割るるあたたかさ

【千空点描】

じゃわめぐ

青森市で育った千空さんは、根っからのネブタ好きである。夏の夜に笛・太鼓の音が聞こえると、「じゃわめぐ」のだそうだ。血が騒ぐというよりも鮮烈な表現である。

毎年、その時期には全国から俳人仲間が五所川原へネブタ見物に訪れる。千空さんは、書店の前にパイプ椅子を並べて栈敷をつくる。「忙しい、忙しい」と言いながらも楽しそうだった。

千空さんの尊敬する版画家・棟方志功さんは、自ら跳人（はねんど）になって、群衆とともに踊り狂った。千空さんも踊りたい気持ちを抑えて、客人を案内していたのだろうか。

あけひろげ佞武多狂ひは童子より 千空
句集にはない、『月刊総合誌あおもり』（第55号）からの1句。
〈佐〉

⑪⑫も『地霊』掲載の句。『地霊』には昭和十八年〜昭和四十六年の句が収められているが、戦前の句はこれら三句のみである。ただし、①のように当時の句そのままではなく、一部が改められている可能性もある。千空さんには昭和二十年前半にまとめたと思われる『千空句帖』がある。藁半紙袋綴じで、B5のひとまわり小さいサイズの句帖であるが、装幀も凝っていて、いわゆる句帖というよりは自選句集といえそうだ。そこには①

⑩の句のすべてが掲載されている。(但し②の「街」は「衢」となっている。)⑪⑫の句のうち⑭の句も『千空句帖』には掲載されているが、他の四句は見当たらない。これらの句はエッセイ執筆時(初出は平成十三年七月「俳句研究」)には「海流」時代のベストだとして掲載したのであるうし、⑪⑫は『地霊』の一頁目を飾ったのだから自信作に違いない。それを『千空句帖』に採らなかつたのは句帖完成後の作であつたからなのだろうか。エッセイからはこの二句も戦前の句である印象を受けるが真偽は定かではない。なお昭和二十二年三月刊行の「暖鳥」(第十一号)には⑪⑫⑬⑭が、③⑤⑥⑦などと一緒に「三十句」と題して掲載されている。

話は変わるが、この頃近所に句会場があつた「十和田」の青森句会に参加したことがエッセイに書かれている。庵主の小笠原我丈が直接誘ひに来た為、二年ほど参加したということだが、正規の会員でなかつたためか、昭和十八年の号と十九年一月号、十一月号の俳誌「十和田」ではその痕跡は認められなかつた。エッセイによるとホトトギス流の俳句を学び、客観写生の難しさも味わつたようである。増田手古奈から「平常心」と「俳句の品格」を学んだという。また、手古奈が「虚子先生の散文は威張っているところがある」と言つたことがあり、「悠揚としてゐるようで、津軽の反骨を感じた」と言っている。これは平成二年十二月十日、『文芸あおもり』の千空対談第一回で手古奈と対談した際に出たエピソードである。手古奈は「ホトトギス」の文章を批評する会「山会」を欠席する時に大岡龍男に「どうも文章は嫌いだし、虚子先生の文章もあまり好きではない。威張ってばかりいて」と言つたという。大岡は

戻つてそれを話したらしく、後から水原秋桜子や高野素十に虚子が怒つていたことを告げられたという。千空さんはそれを聞き「本当に威張つてゐると思いますか。」と聞き返したが、手古奈は「ほんとうにそう思う。」と答えている。残念ながら、対談録に千空さんが「十和田」の句会に出ていた話は出てこなかつた。

(青森県近代文学館主幹／青森市)

—永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(4)—

青森県文芸協会と成田千空

齋藤 美穂

他県に類のない地方総合雑誌の誕生

一九六九年五月、『月刊総合誌あおもり』が創刊しました。地方発信の総合雑誌として社会の諸問題、また地域の文化や人に関する話題を幅広く提供しました。一九八一年から『季刊総合文芸誌あおもり』へと誌名が変更され、文芸愛好者の発表の場をさらに広げることになりました。二〇一四年七月の終刊号(第一六一号)までの四十六年間に執筆や取材協力で誌面に登場したのは約千二百名に及びます。この雑誌を情報源にして地元新聞社が取材するほど地域性の高い、話題満載の雑誌でした。創刊以来編集長を務めたのは佐々木達司氏で、一九七四年からは編集室を五所川原市内に移転し、印刷部門を株式会社文芸印刷へと改組して会員の出版物にも一層力を入れてきました。ジャ

ナルを越えた視点を持った『文芸あおもり』(一九九〇年より誌名変更)が、詩・俳句・短歌・川柳など個別に活動する文化人や多くの一般の人々に多様な文学の形を示し、発表や評論の機会を設けたことで青森県の文芸復興に果たした役割は小さくありません。また読者を惹きつける記事の数々は青森県の風土、世相を反映した貴重な記録でもあります。

発行母体の「青森県文芸協会」は県内文筆家会員に、交流・発表・研究を目的として創立されました。会の名称は「全県」を見据える活動をアピールするための命名で、それ自体決して公的な組織ではありません。会員数が増え、その活動が県内外で評価されようと在野の精神を失わない——有志による活動で、設立の方針を堅持したまま雑誌を存続させることがいかに困難な道のであるかは、その多くが『三号機関誌』の末路を辿る例をみても明らかです。編集サイドに、原稿や資金を確保する不断の努力と、その方針において自らを裏切ることのない信念があつたからこそ多くの執筆者の信頼を得たといえます。その点において全国にも類のない出版事業であつたのではないのでしょうか。

さて、俳人・成田千空がその「青森県文芸協会」の理事長を二十一年間務めていたことをご存知でしょうか。今回は私が五所川原の文芸復興と成田千空について関心を持つきっかけともなつた『文芸あおもり』を辿りながら、一俳人にとどまらない千空さんの姿をご紹介します。

作品寄稿と第一回文芸協会賞

青森県文芸協会設立について、千空さんは後に

次のように語っています。

青森県文芸協会の構想も佐々木達司氏や木村功氏らを中心に、西北地方の文学サークルの試行を経て、県内の文化運動として構想がふくらんでいったわけであろう。文化運動への関心のみならずジャーナリスト的な広い視野からの発信に若い情熱を燃やしていた。私はすこし離れてはいたが、同じ市に住んでいて彼らの熱意を感じていたのは事実である。(第一四六号 理事長 成田千空「三十周年にあたって」より)

会員として第二号から参加した千空さんは一九六九年から一九八二年にかけて十二回、作品を寄せています。各号から一句をご紹介します。

晩稲刈る一隅つよき火を焚けり

〔雑唱〕第六号

雪しろの本流に入る水多くば

〔本流〕第三二号

砂山は狼いろに草枯れゆく

〔砂山〕第四二号

うねり身の樵馬ひかり行く野づら

〔渴の村〕第五一号

心頭や佞武多太鼓の撥は鞭

〔心頭〕第五五号

屋根は大きな翼のごとく雪晴るる

〔声〕第六一号

とど松の緑より覚め嶺幾座

〔八甲田にて〕第七五号

実むらさき七重の丘を来し方に

〔燈〕第八八号

秋嶺の全貌を置き働けり

〔暖鳥〕掲載句 第九五号

虚空界風邪呆けの顔持ち歩く

〔虚空界〕第九七号

波なりに氷面のひろがる家郷いま

〔家郷〕第一〇六号

友の骨草木のみどり総立ちに

〔水の旅〕第二一〇号

五所川原や青森の俳句会では指導者として会員の句集刊行等に尽力する一方、津軽と南部の交流を図り、青森俳壇を意識した活動にも精を出していた千空さんは、中央の俳壇の動向を知るだけに、青森県の文化活動全体が盛り上がる機運を好ましく見守っていたことでしょう。

さて、千空さんは第一回青森県文芸協会賞を受賞しています。一九八〇年五十九歳のことでした。この賞は、文芸協会創立十周年を記念して制定された賞で「文芸活動において著しい業績をあげた個人または一団体に贈る」と規定されています。ジャンルを超え、全県を視野に選考する業績賞の第一回ということで特に慎重に行われた選考の結果、千空さんの受賞となりました。以下は受賞理由です。

成田氏はすでに全国的に高い評価を得ているが、自らは華やかな舞台に出ないで地方にあって地道な作句を続け、後進の育成にあたる。第一回受賞者として最適任、というのが全委員の一致した意見であった。

〔第一〇九号〕

一九五三年三十二歳で第一回萬緑賞を受賞、その後いくつかの合同句集に参加し、自身の第一句集『地霊』を刊行したのは五十五歳。「自らは華やかな舞台に出ないで地方にあって地道な作句を続け」という選考文には千空さんの人となり直

に知る人々の想いも感じられます。この受賞を千空さんはどのように受け止めたのでしょうか。当時の受賞の言葉を引用します。

道はなお遠い 成田千空

わが前の白紙いつまで蟲の故郷

この句は、いつかの句会で蟲という題を出されて、どうしても出来ず、締切間際になって、ふと、わが前の白紙に触発されて出来た句である。(中略)

さて、わが前の白紙は事実でもあり、真実でもあった。俳句という文芸の世界は、類想・類型の海である。私は私の俳句を目ざして四十年ちかい歳月を費やしたが、依然として我が前に白紙が置かれ、松尾芭蕉のいう「ものの見えたる光、いまだ心に消えざる中にいひとむべし」という一句の成就を願いつけている。

今度の賞は有難いが、道はなお遠い。

第一回萬緑賞受賞時を顧みて「賞そのもにはさほど関心がなく、ひたすら草田男選の雑詠「樹頭の花」に作品を問うていた」千空さん。それから時を経て「道はなお遠い」と語る千空さんの姿勢は、あとに続く会員を大いに励ましたことでしょう。またその後の千空さんの俳壇における数々の受賞により、県文芸協会の確かな活動も証明されることになったといえます。

文芸協会理事長就任と企画「千空対談」

一九八六年、前理事長の病氣辞任を受け、成田千空が第三代理事長に選出されました。周囲から適任として推す声が上がったものの、理事長就任を承諾してもらうため、関係者は説得に当たらな

ければなりませんでした。実生活の事情から「困ったなあ」と当惑していた千空さんを決断させたのは何であつたのでしょうか。青森県の文芸復興という大儀、メンバーの熱意——。成田新理事長のもと、千空さんの文学姿勢に敬意と信頼を寄せた協会メンバーとの新たな歴史が始まつたのです。二〇一四年、青森県近代文学館で開催された企画展「成田千空」で、私が注目したのは『文芸あおもり』で連載された「千空対談」でした。その時の解説文を次に掲げます。

月刊総合誌「文芸あおもり」連載企画

千空対談について

千空対談は発行者である佐々木達司氏の発案で始まつた。「文芸あおもり」は一九六九年の創刊以来、ジャンルを問わず広い視野で県内の文芸活動を取り上げてきた。その中で、毎回さまざまな分野で活躍する文化人を登場させ、対談形式で文芸全般について縦横に語り合うというこの企画が生まれた。佐々木氏が聞き手として選んだのが成田千空であつた。氏は、成田千空が若き日から一貫して持ち続けている文学に対する厳しさ、広範かつ旺盛な探究心をよく知る人物のひとりである。そこで、対談相手やその内容は千空に一任する形で引き受けてもらったという。この企画は、全県規模で視野の広い文芸活動をめざす青森県文芸協会設立の趣旨にかなうと同時に、成田千空にとっても刺激的な企画となつた。

対談者は増田手古奈（第一三六号）、小野正文（第一三八号）、船水清（第一四〇号）、京武久美（第一四二号）、小田原金一（第一四二号）、和田現（第一四三号）、小山内時雄（第一四四号）、浅利康衛（第

一四五号）、きしだみつお（第一四六号）、佐藤貞樹（第一四七号）、中寒二（第一四八号）、服部進（第一四九号）、中村雅之（第一五〇号）の十三名で、千空さんは入念に下調べをして対談に臨んでいたといひます。寡黙なイメージの千空さんとは打って交わって積極的な進行ぶり、随所に千空さんの体験談や持論が繰り広げられ、実に興味深い企画でした。芸術全般への造詣の深さ、相手を受け入れる間口の広さに驚くと同時に、私はこの対談によつて「全てが俳句作りに役立つ」との考えから千空



千空対談 第一回「増田手古奈」(文芸あおもり 第一三九号)

さんが長い時間をかけて耕してきた千空俳句の土壌の豊かさを知つたのでした。

千空さんはこの対談録を後々読み返したそうです。最終回となつた二〇〇三年の暮れに肺炎で入院した千空さんは体調に不安を抱えながらも読売新聞俳壇選者や俳句結社「萬緑」の代表としての仕事を精力的にこなし、二〇〇七年十一月八十六歳で亡くなりました。千空さんを偲ぶ『文芸あおもり』特集号（第一五五号）のページは、編集長の野沢省悟氏の次の言葉から始まつています。

千空氏は理事長として、何かを指導したり、我々を引っ張って行くということではなかった。だが、一俳人としてのその姿が、同時に一文芸人であり、一文学者であつた。我々はその存在に触れることによって、言葉では言い尽くせない文学というもののあり様に触れることができた。文学を志す者にとっては、まことに貴重で幸せなことであつたと思う。

在任中、千空さんは仲間と集い話すことを楽しんでさうです。ジャンルを問わず語り合う交流の場で、大好きなお酒を呑みながら時に饒舌になり「どこが寡黙な成田千空なの？」と突っ込まれた千空さん。佐々木氏から伺つた微笑ましいエピソードです。文学に生きる厳しさと穏やかな人柄で会員に慕われ、「青森県文芸協会」にとつて頼もしい理事長であつた千空さんですが、千空さんにとつてもまた、かけがえのない時間を得た二十一年間であつたのではないのでしょうか。

(千空研究会調査研究員／五所川原市)

【訂正】前号齋藤稿、9頁中段後ろから5行目、方言詩99編とあるのは(9編)の誤りでした。お詫びして訂正します。

【歳時記に採られた千空句】④

『萬緑季寄せ』

春

春 妻の眉目春の竈は火を得たり
二月 風二月石をずらせば墓の穴
如月 きさらぎの雪の羽毛を被て妻よ
三月 三月の土間に大きな山の靴
春暁 ねむる子に北の春暁すみれ色
春の雷 春雷のあとつくしき燈のすべて
薄氷 流れいま薄氷越ゆる浅みどり
梅 古稀よりの月日は祈り梅白し
紅梅 雀来て紅梅はまだこどもの木
連翹 連翹の鞭しなやかにわが夜明け
林檎の花 横顔は十に七つや花林檎
春の草 やすらはむ雀隠れの仏たち
蒲公英 たんぽぽの絮なき萼(うてな) 砲座
幾座
虎杖 一寸の光陰赤き虎杖(ぐぐい)の芽
蕨 雄の馬のかぐろき股間わらび萌ゆ
露の臺 墓はその重さに据わり露のたう
仔猫 黒猫は仔も黒猫のうれしさに
亀鳴く 亀鳴くや一升瓶に手が伸びる
雲雀 機械は主軸油びかりに揚雲雀
燕 乙鳥の胸のまろみも日の出前
鳥帰る 鳥帰りはや空脛の少女たち
鴨帰る 帰る鴨差し迫るもの何々ぞ
巢立 鷹巢立ちひかり流るる塵芥
桜鍼 みづうみはさざなみづくし鍼どき
蛭 かたかたと木橋渡れば蛭村
雲丹 組板に十方空の雲丹一つ
草餅 信心の餡たつぷりと草の餅
春障子 夢のあと日の遍しや春障子
苗木 苗幌や落ちなんとして日は鬱金
接木 しなのめの紅さしのぼる接穂かな
蛭取 速くるて遠世のごとき蛭搔
風車 風ぐるま光りを紡ぎ廻る子よ

夏

閏鶏 閏鶏の血を見て帰る疾風なか
水口祭 水口(みと)祭はこべの緑敷きつめ
て
こどもの日 小鳥屋に兎も亀もこどもの日

夏 妻が病む夏組板に微塵の疵
立夏 雀らに水の円光夏来たる
五月 五月来る夜空の色のインク壺
麦の秋 会ふや又別れて遠し麦の秋
青田 大粒の雨降る青田母の故郷(くに)
滝 白光の天上天下那智の滝
泉 言霊の茂吉のくにの泉かな
萬緑 萬緑や牛飼ひの掌のひろく優し
卯の花 母が家へ卯の花峠雨あがる
松葉牡丹 松葉牡丹咲きひろがりて母の飯
墓 墓鳴いて孤島のやうな大墓屋
螢 一夜二夜螢はつひに愁ひの火
斑猫 みちをおしへ乞食も家へ帰るなり
空蟬 空蟬の脚につめたきこのさみしさ
螻蛄 おけら短命到る処に燈がついて
水着 水着緊むる雪国肌まされなし
ハンカチーフ ハンカチをいちまい干して静
かな空
冷麦 冷麦や生絹(すずし)のやうな嵯峨
の川
搔水 大和路やかき氷にも茶の香り
夏蒲団 夏掛の山繭いろに熟睡(うまい)妻
代掻く 敗けたりと思ふや代田泥深く
早苗饗 早苗饗のあいやあいやと津軽唄
麦刈 子は額(ぬか)で押しゆく母の麦車
跳 拇指太く反るザビエルの跣足かな
夜店 荷一つの夜店をひらく女かな
父の日 父の日の橋に燈点る船のやう
桜桃忌 存(な)がらへて草むすばかり桜桃
忌
草田男忌 鬱蒼と東北は雨草田男忌

秋

秋 妻を語る秋栗色の大きな眼
残暑 神将の怒気浴びて立つ残暑かな
秋分 わが秋分はるばる野への切符買ふ
天高し 天高く梵鐘の名は奈良太郎
秋風 秋風の羊ごつこつ闘へる
颱風 台風の迫るや屋根を踏む鴉
露 病む母のひらがなこぼ露の音
秋の山 土偶みな寝に帰るたき秋の山
水澄む 友垣や火の燃え水の澄むところ
林檎 草に水に紅涙まざと落林檎
猪独活 ししうどや金剛不壊の嶺のかず
玉蜀黍 鯉ほどの唐黍をもち故郷なり
紫式部 恋をせよ旅をせよと実むらさき
玫瑰の実 昨日今日明日赤々と実玫瑰
鳴 鳴の嘴岩一と色に寄る辺なや
秋刀魚 秋刀魚食ふ鰯より癒ゆる思ひかな
鮭 風三日銀一身の鮭届く
秋の蝶 中流は芥も舞ふよ秋の蝶
鈴虫 鈴虫や家へ押し入る山の闇
蠡螋 水屋辺は祖母よりの闇きりぎりす
蠅 水まきりの腹てのひらに都遠し
新米 山よりの日は金色に今年米
とろろ汁 妻老いて母の如しやとろろ汁
稲扱 晩稲扱く心胆あつき老ならん
凶作 不作田の彼方岩木嶺屹立す
葉塚 葉塚幾座厠に気張る声すなり
佞武多 佞武多みな何を怒りて北の闇
孟蘭盆会 大いなる山に向ひて盆の道

冬

師走 極月の迎りを払ふ樞かな
大寒 大寒の鉦かかんかと野は平ら
厳寒 酷寒のにはとり紙を喰ひにけり
風 こがらしに母在り熱き飯ほぐす
時雨 山川の山はかくれて初しぐれ
雪晴 屋根は大きく翼のごとく雪晴るる

雪しまき 銀日輪飛雪を凌ぎゆくものに
冬の川 仰向けに冬川流れ無一物
冬の梅 寒梅の花かず日かずよむ子欲し
寒雀 友が地や丸石(ころた)とまぎれ寒
雀

人參 人參赤し男なきは愛無かるらむ
燕 ひかり降り雨ふる壺(はし)の赤か
ぶら

冬芽 満々たる馬の瞥見え冬越す芽
鷹 鷹ゆけり風があふれて野積み藁
白鳥 白鳥千羽東にひらく海と空

鰯 老いの緒顔子等の紅顔鰯船来る
海鼠 身の弛み海鼠の濡身吾を映す
虫 草あれば水あれば鳴き残る虫

オーバーコート 外套に胸ボタン無し母無か
らん

アノラック 村を発つ幼女は花のアノラック

寒餅 寒餅に搗きこむ奥の草のいろ
納豆 あつあつの飯に納豆旅終る

寒卵 働けとごとく大きな寒卵
雪囲 雪囲ひ天日淡くやすらへり

防雪林 防雪林吾を待つ母の今も貧し
雪卸 大空に力をもらひ雪卸す

焚火 焚き添へてふくらむ藁火遠い母
焚火 いちまいの席にすぎぬ席織る

藁仕事 大熊手小熊手そして万の素手

西の市

新年

新年 年のこの小さきあぐら年新た
去年今年 去年今年一と擦りに噴くマッチの
火

成人の日 成人の日をくろがねのラッセル車

萬緑季寄せ 題字 成田千空

2000年8月25日発行

定価 4000円

編集 萬緑運営委員会

発行 萬緑発行所

B6判、上製、429頁。

俳句の風土性

成田千空

俳句の風土性は、俳句の母胎のような性質のものである。この母胎から生れた人の言葉と、言葉の間から生れた様式が在って、俳句という文芸が行われているわけである。だが、風土性というものをとくべつ意識しなくとも、俳句は人々の目と心の領域で多種多様な生成ぶりを示して来たことは事実である。で、風土性について考えるとき、自分の存在の源を省みるしかないことになる。一句をつくるとき、やはり母胎感覚がうごく。それは風土性の感覚だといちいちさとするわけではないが、発想から表現の課程で、言葉に存在感を求めてゆく要素が、実は風土性にふれていることになるかもしれない。

私は風土性というものについて、あまり論理的に考えたことがない。だが、時折り考えるより先に感じ、感じる密度の中に風土は在る、というかたちがいちばん自然に思える。感じなければ在っても無きがごときものである。あるいは、理窟ぬきに在るものだから、改めて感じるモーメントを掴むことは、むしろ容易でない。父に死なれた人が、あらためて父の存在を感じるように、風土を感じるモーメントにも何か人間存在の愛しみの種がひそんでいるように思える。

生きかほり死にかほりして打つ田かな

村上鬼城氏のこの句には風土の感じがよく生きている。刻一刻、一と鍬一と鍬、入念に、ねばり強く打ち続ける田打ちの内に持続している時間が見え、田のひろがりが見える。「人は死に、人の間は変わる。しかし絶えず死に変わりつつ、人は生き、人の間は続いている。それは絶えず終ることに絶えず続くのである。——だが、歴史性のみが社会的存在の構造なのではない。風土性もまた社会的存在の構造であり、そうして歴史性と離すことができないものである。歴史性と風土性の合一において、いわば歴史は肉体を獲得する」という和辻哲郎の風土観の核心と、鬼城の一句は暗合しており、しかも言葉として鬼城の一句はいかにも自然である。鬼城は必ずしも風土を主題として意識しているわけではなく、生活感情に根ざして田打ちの核心をとらえ、ひろく人間存在の実質にふれている。習慣化した日常の時間に作者は居るように見えて、実はあらためて感じたものから言葉が生れている。生が見えると同等に死が見える地点に作者は立つており、習慣化した日常性を透視した発想の力が言葉にはたらいっているわけである。この時あらためて感じたものこそ風土の実質なのだと思う。意識というより真実感、それが一句の土壌と化して、地続きの歴史を保証しているのである。田打ちなど殆ど見られなくなった現代では——、いや、耕耘機だって、生きかわり死にかわりして田を耕していることに変わりはない。ただ惜しむらくは田打という言葉の力に匹敵する言葉が未だ発明されていない。鬼城の句は今日なお田作りの存在を喚起する力をもっている。言葉の地味がもつ力。これが今日の俳句に乏しいといえるかもしれない。

「人間は風土によって自己を了解し、同時に人間の、すなわち個人的、社会的なる二重性格を持つ人間の、自己了解の運動は歴史的存在である。従って歴史と離れた風土もなければ風土と離れた歴史もない。これが人間存在の根本構造である」という和辻風土論が、今日でも有力な風土の基礎理論なのであろうか。「一層具体的な地盤たる人間存在にとつては、それは共同態の形成の仕方、意識の仕方、従って言語の作り方、さらには生産の仕方や家屋の作り方等々において現れてくる」というとき、それはごく当り前のことだと思われてくる。あらゆる仕方をふくむ生き方と結びつく発想に、風土性は素顔で現われ、それ以外の顔をもちたないのかもしれない。興味本位に考えれば、甚だ野暮くさいことである。ただ「言語の道は具体的な行為で、その人その人の気質なり肉体なりに深く関係しなければ正当に働かない」という小林秀雄の、これまた当り前のような考え方が思いうかぶ。この当り前の路線から離れて、小綺麗に、あるいは面白可笑しく言葉と遊ぶことも出来るし、自ら難題を課して言葉を苛めることも出来るが、正当な自分の言葉で句をつくる営為に欠くことができない存在感を求めるとき、風土性というものがかなり手応えのあるものに感じられてくるわけである。「作家（創作家）自身、自分がどこに属しているのか、どういう土地柄に根ざしているのかということについての反省を行なう余裕を失っている」のが現代の風潮だとする小林秀雄の説は一転して、「俳句というものを、もう一ぺん評価しなおさなくてはならない、あれがとにかくずっと生きていたこと、文壇なんかと何の関係もなく生きていたこと、これは大へんなことだ」という。（江藤淳との対談「歴史について」）だが、現代俳句は果して、現代人が見失ったものを、見返すだけの在りようをとり続けているかどうか。かなり冒されている面もあるにちがいない。

私どもの津軽地方では、昭和の初期に詩人福士幸次郎の地方主義運動が興り、その実践として方言詩がさかんにつくられた時期があつて、高木恭造の詩集「まるめる」など今日なお人々に愛読されている。いちばん短い詩に、

百姓

吾^ワの鼻^{ハナ}穴^{アナ}がら蝗^{トウモロコシ}コはねだではせ

というのがある。結語の「ではせ」は話をまことしやかに伝える一種の感嘆詞で、聞く方は自然ホウという気持ち

になる。鼻孔から蝗がはねとぶほどのさかんな生命力と、土俗的なユーモアが一体となって、百姓の存在が際立って感じられるわけである。こうした言語体験は偶然性と必然性の出合い、いわば触発の火花であり、創造である。しかもポエジイの母胎が明瞭であり、言葉が肉体化されきっている。この辺に作品が愛誦される要素がひそんでいるのであろう。

宮沢賢治の

高原

海だべがと おら おもたれば

やつぱり光る 山だたぢやい

ホウ

髪毛 風吹けば

鹿踊りだぢやい

になると、更に風土性がリファインされ、地方語が詩語となりきっている。高木詩の風土性は生活的であり、宮沢詩の風土性は精神的であるという領域のちがいがあっても、言葉がそれぞれの在りようで正当に働いている。今日、津軽の言葉で詩を書ける人が居なくなつたのは、一つには地方の言葉すら風土のエスプリが稀薄になつたせいかもしれない。それに代るどういふ言葉を正当に獲得したかという問いに答えることはむずかしい。

一方、私どもの地方の俳句に、昭和初期から郷土主義を称える運動が見られるのも、福士幸次郎あたりの影響かと思われるが、俳句のばあい、一つには中央俳壇の俳句評価と別の評価基準をつくって特殊性を育てようとしたことと、中央の権威に対する地方の権威という俗な要素もあって、特殊性を育てる以上に俳人の視野を狭くした面もあったと思える。発想における郷土性がホームグラウンド化して、エスプリがむしろ鈍化する傾向の中にいまもって安住している人が多いのである。私なども時には安易な郷土性にまぎれこんで己れを見失うことなしとしない。

俳句の風土性というとき、俳句の様式の特異性と、発想領域の特異性が重なって、慣れあいになる面も感じられる。まして郷土俳句という称えは更に安易な自足感を誘う面がある。そうであつてはならないなら、一層強靱なエスプリを培う必要があるわけである。

俳句の風土性について、その実質を語るには我が俳句の風土性について語るにしくはないと思うので、覚え書の一つ付け加えて置こうと思う。

大粒の雨降る青田母のくに

昭和二十一年の夏、この句が私の手帳に書きとめられた。その前後のことをすこし書いてみたい。——昭和二十年七月の青森空襲で私は一切が無力化した国の断末魔を見た。おびたらしい黒焦げの市民の死体を見、火ぶくれの負傷者の群を見、文字通りの焦土を見た。空襲の数時間前まで我々は燈下管制下の乏しい灯を頼りに句会をやっていたわけであつたが、一木一草もとどめない一夜の空襲の暴威はもちろん我々の俳句をも焼き払つた。敗戦後、北津軽の母の故郷に移り住んで開墾や田畑の仕事が続いているうちに、私の内部に眼を覚ました感情があつた。ある日、田仕事の帰りみち俄か雨に会つた。雨に濡れるおそれより先に、青田がいつせいにざわめきはじめた。その光と韻きと甦つた緑の生気に感動したのであつた。ここは母のくにであるというごく素朴な源泉感情が、自分の内部に眼ざめた。それは生きる理由に照応するものであつた。生き残つて、ただもう生きるために生きている本能とエゴイズムのひしめき合う国にいる我々——少なくとも自分にとって、風土に触発した一つの感情のかたちをとらえ得たことは、当時、あらためて自分を発見したようなものであつた。国という一つの体制の死に對して、なお生きつづける風土があるなら、風土のエスプリも生きつづけているはずであつた。サルトルがいう「人間の国籍とは、彼らの生き方、働き方、愛し方

そのものである」という考え方が身近かに感じられた。風土は自然そのものではなく、自然と人間の相關関係から生れた一つの実体であつて、エスプリの母胎をなすものである。

金子兜太が「今日の俳句」でとりあげた私の一句についての評言は、個人の評価を越えて、俳句の風土生をとらえた言葉としても立派であつた。

野は北へ牛ほどの藁焼き焦がし

「原野には何も無い。収穫のあとであろうか。何も無い。その一個所に、藁が積まれて、焼かれている。ぼうぼうと燃えているのではなくて、まわりは黒く、中は赤く、積まれた形をくずすことなく中へ中へと燃えてゆく感じである。積まれて、しかも黒くくすぶっている形が、まさに牛のように見えるのである。煙は、北へ流れてゆく。野を這い、横切つてゆく。この景の背後には、冬のくる大地、暗い空が見え、その土地の人びとの農耕の生活が荒々しく甦つてくるのだ。〈牛ほどの藁〉などやはり東北の農村生活のただ中にいないと出てこないし、それを言葉として定めるためには、感覚の働きにたよっているだけではだめなのだ。この牛、作者の重い心の姿（心象）である。それが火をこめて焼き焦げ、煙は北空へ流れる。混濁の存在を知るもののみが示しうる想いと決断がある。重い東北の空と大地——人はそれを風土と言う——が色濃く基底を色どるのも、存在感の深さによるものであつた。」

我が俳句の風土性の基底は、斯くのごとく大まじめなのは、我が時代と生活の歴史の反映であろうか。いうまでもなく、風土性だけが俳句の要素ではないが、俳句の風土性について、いうならば、これ、この通りという次第なのである。

鏡にうつる自分を観るようなものである。

昭和48年7月号

俳誌『暖鳥』 千空資料を撮影

昨年11月23日、県近代文学館において俳誌『暖鳥』千空関係資料の撮影を行いました。千空が創刊とともに参加、選者として活躍した俳句雑誌です。齋藤調査研究員と佐々木が丸一日かかり352枚撮影しましたが、3分の1に過ぎません。今後も継続します。

県近代文学館にはいろいろご配慮いただきました。

『千空句帖』の刊行を準備

千空は戦時中、手づくり句集『千空句帖』をつくっていました。その原本は県近代文学館にあります。戦後も封印されていましたが貴重な研究資料であり、227句を影印版(直筆)で刊行することになりました。編集・解説は県近代文学館主幹・西谷ともえさん、青森文芸出版からブックレット(予価1000円)として4月ごろ発行の予定です。

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。どなたでも、自由にお書きください。

1. 調査・研究に関するもの(4000字以内)
2. 回想の成田千空(2000字以内)

締め切り 第6号は4月末、到着順に掲載します。

* 稿料は差し上げられませんが、掲載紙をお送りします。

送り先 (下段発行所、青森文芸出版あて)

* Eメールで送信くださる場合

sasaki@a-bungei.co.jp

会員名簿 (41名)

〈青森市〉 浅利康衛、高森ましら、西谷ともえ、野沢省悟、吉田州花、成田奉生

〈平内町〉 佐藤陽子

〈弘前市〉 阿保子星、石崎志宏、泉風信子、市田由紀子、鎌田義正、後藤隆、館田勝弘、土田紫翠、三上弘之

〈藤崎町〉 清水雪江、世良啓

〈八戸市〉 上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次

〈十和田市〉 日野口晃、米田省三

〈五所川原市〉 一戸鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、野村正彦、浜田和幸、松宮梗子、山内ひろ子

〈板柳町〉 木村武彦

〈深浦町〉 草野力丸、山本こう女

会費を納入してください

今年の会費1000円を同封の振替用紙により納入ください。納入済みの方には入れていません。

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年1000円です。

青森文芸ブックレット

『本と戦争 ― 本は、戦争とどう関わったか』

佐々木達司 文学講座講演記録。税込 500円

『中村草田男訪問記』

成田千空 師・中村草田男を訪ねた若き日のこと。

『暖鳥』掲載2編、日記1編。税込 500円

青森文芸出版

☆北極星☆

○今回は、歌人の中村雅之、川柳作家の野沢省悟、高橋竹山記念資料室の佐藤陽子の三氏から原稿をいただいた。千空さんは短歌や川柳についても理解があつて興味深い。短歌観・川柳観は「千空対談」でも知ることができる。生前の高橋竹山とは知遇はなかったが、佐藤貞樹氏との対談などを通して、竹山に興味を抱いていたことが窺われる。竹山を詠んでいた句が8句ある。資料価値も高い回想記である。

○意図したわけではないが、先号は草田男、今号は文芸協会特集のようになった。県文芸協会の歴史45年中、千空さんは21年間も理事長をしておられた。文芸協会の事が出てくるは自然であろう。

○千空さんの俳句や文を読んでいると、その語彙力に驚かされる。読書家であることは知られているが、残された蔵書から文学や哲学を本気で学んでいたことがわかる。それが語彙を増やし、俳句に生かされていたのだらう。読む側の語彙力分だけ、千空俳句を理解していたことになる。もっと深いメッセージがこめられていたかも知れないと思う、このごろである。

2016年2月15日発行
会報『千空研究』第5号

非売品(会員配布)

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-355-5323
FAX 0173-355-8414